

25年前のサンゴ事件から一向に変わらない朝日がどうして今後変わる？

『週刊ポスト』(14.9.5)は、「吉田調書」誤報を解き明かすヒントは新聞協会賞を受賞した『プロメテウスの罠』にあるという記事を掲載している。

《同連載では事故直後の官邸の動きを検証した第6シリーズ「官邸の5日間」で撤退論争を取り上げ、菅側近の寺田学・首相補佐官(当時)ら菅政権側の証言をもとに、「東電が原発から撤退したいと言っている」と官邸が大騒ぎになり、報告を受けた菅首相が東電本社に乗り込んで「撤退はありえない。撤退したら、東電は必ずつぶれる」と一喝して撤退を食い止める様子が活写されている。

反原発論の立場を取る朝日とすれば、原発事故の当事者である東電が「悪者」で、その前に立ちはだかる菅首相は「正義の味方」の色分けであり、その構図を強調するには、東電が国民の安全を脅かす「撤退論」を唱えていたとするのが都合がいい。しかし政府事故調の調査によると、実際は官邸側にも清水社長ら東電側から「撤退」という言葉を聞いた者はいなかった。

そこで、吉田調書の入手を機に、第一原発所員の行為を、「命令違反で撤退」と判断することで「東電は逃げた」論の材料にしたのではないかと。

「官邸の5日間」の章が菅政権擁護の立場から書かれたことは朝日自ら認めている。連載をまとめた単行本『プロメテウスの罠』第一巻のあとがきにこうある。

〈第6シリーズは「官邸の5日間」。4月以来、国の原発対応が杜撰だった点を首相の責に帰す報道が続いていた。第2シリーズの取材をしていて感じたのは、それへの違和感だった〉》

記事は、《そうした朝日の報道のありかたは慰安婦をめぐる虚報問題と重なる。》と続くが、もう一本、『週刊新潮』(14.9.18)にも〈原発「吉田調書」誤報の影に「菅直人」元総理の昵懇記者〉の見出しで、5.20朝日の報道の「記事の陰には原発ゼロでスタンスを同じくする「菅直人」元総理の昵懇記者の存在があった」と冒頭から記された次の記事が掲載されている。

「自らの主張を押し通すためには、史実を捻じ曲げることもさえない。そんな朝日の企業体質は、原発事故報道でも遺憾なく発揮されている。」とこきおろされ、「そもそも、「吉田調書」は、菅直人元総理からリークされたのではないかと、社内ではもっぱらの噂になっています」と話す朝日の中堅幹部によって、次のように明かされている。

「というのも、その記事には、菅さんとベッタリの記者がかかわっていたからです。現在は、福島原発事故をテーマにした『プロメテウスの罠』という連載を担当する特別報道部の幹部を務めている。もともとは政治部の記者で、菅さんとは家族ぐるみの付き合いだそうです。現に、菅さんが総理だったとき、電話一本で話せる間柄であることを自慢するような記事を書いていました」

要するに、《菅リーク説の疑いをより深めるのが朝日の記事が菅元総理を援護射撃する内容だったことである》と断定されているが、「吉田調書」問題をいくら追求しても、朝日の底の浅さが浮かび上がるばかりで、朝日は徹底的に批判されても仕方がないし、解体をくぐり抜けたほうがよいとしか思われない。

9.14朝日の「声」(高校生 篠原 柊 滋賀県 17)欄には、「吉田調書」についての《あの記事は最初から「相手を批判し、揚げ足を取ってやろう」という目的ありきで書いたのではないかと疑わざるをえない。そうであるとしたら、なぜそのようなことをしたのか、その目的も意図も私にはさっぱり理解できない。／事実を歪曲してまで記事を書くのは、報道機関としてあるまじき行為だ。名誉毀損にもなりかねない。そもそも、こうして吉田調書が公表されれば、誤報であることが明るみに出る。そのことに、なぜ頭が回らなかったのだろうか。》と、誰もが感じる疑問を率直に声に出しているが、もし上記の週刊紙に書かれているように、《朝日の記事が菅元総理を援護射撃する》ためだったということになれば、どのような「声」をさらに上げることになるだろうか。

前日の朝日「声」(大学生 久保田 圭祐 神奈川県 21)欄には、「サンゴ事件の反省を忘れたのか」の見出しで投稿されている。

《「落書き、ねつ造でした 深くおわびします」。1989年の朝日新聞1面の見出しだ。朝日新聞の記者が自らサンゴを傷つけ、捏造報道した。4半世紀前のこの一件を私は授業で知ったが、特ダネ欲しさという背景、チェックが不十分であったという点、社の方針が定まらず謝罪が遅きに失した点な

ど、今回の吉田調書の記事撤回との共通点が多い。

当時の社説は「信頼を回復する道は平たんではないが、私たちは一步一步、進んで行きたい」と誓った。あの反省は忘れたのか。報道人として、感覚麻痺がなかったか。傲慢さはなかったか。

権力監視という点から朝日新聞の姿勢は評価できるし、その必要性は最近ますます高まっているように思う。だからこそ、朝日新聞には最後のチャンスを与えたい。吉田調書の記事も、慰安婦問題についても、すべての要素を丁寧に検証するべきだ。その上で過ちを顧みて自省してほしい。

次はない。この認識を肝に銘じ、実直な姿勢で、権力を監視する報道機関としての使命を果たしていくことを期待する。》

全文転載であるが、サンゴ事件から25年かけて「一步一步、進んで」きた結果、今回の問題に行きついたのか、と呆れるが、《権力監視という点から朝日新聞の姿勢は評価できる》について、一つは権力を監視する者もまた自らを厳しく監視できなければ、権力腐敗と同様の腐敗をこうむることになるという点、もう一つは「吉田調書」問題についていえば、朝日は菅首相の民主党政権の権力監視をはたして貫いてきたのか、《権力を監視する報道機関としての使命》をおろそかにしてきたのではなかったか、という点である。《権力監視という点から朝日新聞の姿勢は評価できる》にしても、戦後長く続いてきた朝日の神話であったことの覚醒を読者ももつ必要があるだろう。《次はない》は読者にも向けられているのだ。

1989年当時は朝日の購読者でありながら、「サンゴ事件」については切迫したいくつかの問題に直面していたために、捏造の記憶しかない。そこで空白の記憶を振り返るために、どんな事件であったのかを調べることにした。まず1989年（平成元年）4月20日付朝日夕刊の連載企画「写'89『地球は何色?』」[2]に、高さ4m、周囲20mという世界最大級のアザミサンゴとしてギネスブックにも掲載されたことがある珊瑚が傷つけられた6段抜きのような大きなカラー写真が掲載され、《沖縄県西表島のアザミサンゴに落書きがあることを発見した》として、以下のような日本人のモラル低下を嘆く新聞記事が掲載された。「サンゴ汚したK・Yってだれだ」の見出しである。

《これは一体なんのつもりだろう。沖縄・八重山群島西表島の西端、崎山湾へ、直径8メートルという巨大なアザミサンゴを撮影に行った私たちの同僚は、この「K・Y」のイニシャルを見つけたとき、しばし言葉を失った。巨大サンゴの発見は、7年前。水深15メートルのなだらかな斜面に、おわんを伏せたような形。高さ4メートル、周囲は20メートルもあって、世界最大とギネスブックも認め、環境庁はその翌年、周辺を、人の手を加えてはならない海洋初の「自然環境保全地域」と「海中特別地区」に指定した。

たちまち有名になったことが、巨大サンゴを無残な姿にした。島を訪れるダイバーは年間3千人にも膨れあがって、よく見るとサンゴは、空気ボンベがぶつかった跡やらで、もはや満身傷だらけ。それもたやすく消えない傷なのだ。日本人は、落書きにかけては今や世界に冠たる民族かもしれない。だけどこれは、将来の人たちが見たら、80年代日本人の記念碑になるに違いない。百年単位で育ってきたものを、瞬時に傷つけて恥じない、精神の貧しさの、すさんだ心の……。にしても、一体「K・Y」ってだれだ。》（太字は引用者）

後に朝日新聞社のカメラマンが自作自演で珊瑚に落書きによる傷をつけ、その写真をもとに新聞記事を捏造した虚報事件であることが判明した。太字箇所注目すれば、単なる虚報事件でないことがわかる。記者自らサンゴに傷をつけて、自らが発見者であるかのように装ったということであるなら、投書子がいうように《特ダネ欲しさという背景》で説明できるかもしれないが、この太字箇所を目にすれば、とてもそんな簡単な説明で済まされそうにない。《百年単位で育ってきたものを、瞬時に傷つけて恥じない、精神の貧しさの、すさんだ心の……》持主はほかならぬ自分自身であるのに、そのような一片の自覚ももたずに、日本人全体の問題であるかのように平然と言っている振舞いの心性は、もちろん、考察に十分値する。

このような心性が記者自身の特性であるのか、それとも朝日の体質にもなっているのかは即断できないとしても、「吉田調書」問題や「慰安婦」問題を並列させれば、門田隆将がいうような「朝日新聞は事実を曲げてまで日本人をおとしめたいのか」という口調はあまり好まないが、そのように指弾されても仕方がない十分な根拠を朝日が与えていることは確かである。ネットでは朝日の「反日」体質としてまかり通っているが、このレッテルが悪質であるとするなら、それは朝日の記事の不公正さ、悪質さの投影とみなすのが妥当であろう。